

「明王」は、仏教の守護者として、迷いの世界にいる人々を仏の世界へ導いていくという性格をもっています。

「明王」とは、インドの古い言葉で「アチャラ・ナータ」といい、「真実を知る智慧の王様」という意味があります。

その明王の中でも、とりわけ不動明王は、広く一般的に“お不動さま”と親しげに呼ばれていますが、いかめしい顔つきでジロリと睨まれていると、悪いことなどしていないのに、なにやら落ち着かない気持ちになります。不動明王は、ヒンドゥー教の神であるシヴァ神がモデルであるという説や、大日如来が変化したもの、もしくは大日如来の脇仏とされています。

皆さんが不動明王をご覧になったとき、違和感を感じたことはありませんか。剣と縄を持ち、顔は厳めしく背中に火炎を背負っていますが、体は金剛力士のような立派な体格ではなく、どちらかというといふくよかな体つきです。

実は、不動明王は子どもの体型をしているのです。大日如来のお使いをする子どもとして仏様の手伝いをするという説が、その理由のようです。髪の毛はまとめて左の耳のそばに垂らした弁髪にし、古代インドの王族が子どもの時に着ていたような衣装を身につけて、剣には俱利伽羅竜(くりからりゅう)という竜が巻き付き、煩惱を縛り付けるという縄を持ち、ぽっちゃりとしたお姿は、悪戯好きの子どものようにも見えます。

また、不動明王の隣には、二人の子どもがいることが多いようです。その名は、矜羯羅童子(こんがらどうじ)と制吒迦童子(せいたかどうじ)といい、明王の家来のような存在であり、やはり童子、子どもの姿をしているのは、不動明王と同じです。純粋無垢な子どもの心を持ったお姿で、この三人が悪い影響を与えるものを取り締まり、人々の煩惱を除く役割をしっかりと担っていると言われます。

不動明王は、仏の教えを聞いただけでは受け入れようとせず反抗的である者に対しては、目をむき、歯を出して威嚇してでも、人々を素晴らしい仏の世界へ導こうとしているのです。

不動明王は、地域の人々の信仰を集めており、宗派にこだわらずに、お堂にまつられていることが多いです。出会いましたら、どうぞ手を合わせ、自分の煩惱が少しでも無くなりますようにと祈り、精進してみてもいいのではないでしょうか。